

「今、お帰りになって大丈夫ですか？」

事務所を爆破された連中が、狂ったように探し回っているのではないか。気にする新一に、彼は一つ頷いて見せた。

「黒羽組は小さな組織ですが、そんなへまをする組員はいませんよ。ご心配なく。それに、もし何かあったとしても」

と、ツイードのジャケットの胸元を叩き、

「これがありますから」

ホルスターに収めた拳銃のことを指しているのだ。

部屋を出て行く彼にもう一度礼を言い、新一は寝室へ戻った。

毛足の長い絨毯も厚地のカーテンも、品の良いベージュでまとめられた部屋。新一は、天井の蛍光灯を消し、片隅のスタンドライトだけを点した。温かな淡い灯りに照らされて、部屋に陰影が落ちる。

中央には、キングサイズのベッドが一つ、置かれている。快斗はその上につつ伏せていた。先刻新一が運び込んだそのままの格好だった。

傍らに寄り、そっと声を掛ける。

「寺井さん、帰ったから」

「……そうか」

眠っているかと思ったのだが、意外にも心えがあった。

「起きてたのか」

「寝てはいない……けど、動けない」

「『ジユクの若』も風邪を引いたら、ただの人だな」

「俺は元から一般人だ」

「抜かしてる。とりあえず、スーツ脱いで楽にしるよ。」

手エ貸してやるから」

洩る彼を半ば強引に引き起こし、ネクタイを引き抜く。ベストの下のシャツは、じっとりと汗を含んでいた。

シャツのボタンに手を掛けると、不意に快斗が嫌な笑みを浮かべた。

「今ならお前の好きに出来るぞ。昨夜の仕返しでもするか？」

「なっ……！」

にやつく彼の口元をびしゃりと叩き、新一は立ち上がった。支えを失って、再び快斗がベッドに埋もれる。